

平成 29 年度 大学院共通科目「国際インターンシップ」 公開報告書

生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程 2 年 斉藤真里佳



1. 目的

本プログラム参加の目的は、日本人が建築の分野で海外就職を行う際に必要なスキルや考慮事項を知り、日本との比較を行うことである。それにより、自分自身またはこれから卒業する学生が海外（特にヨーロッパ）で就職を考える際の手助けとなることを意図している。一部建築分野にのみ当てはまるものもあるが、一般的に適応できるような情報も得ることが目的である。

2. 実施内容と成果

本プログラムは、建築設計ワーク・レクチャー・街歩き・建築事務所見学から成り立っている。それぞれについて、以下の内容とそれによる成果を得ることができた。

2-1. 建築設計ワーク

コペンハーゲン市内「Sundholm」と呼ばれるホームレス用の地区を対象地とし、最終的な成果発表を実際のクライアントであるコペンハーゲン市の職員約 10 名に向けて行った。日本の建築学科ではクライアントと直接関わりながら設計を進めていくことは極めて稀であるが、今回このような機会を貰えたことで、実務にも繋がる多くを学び取ることができた。例えば、デザインを変えたいと思う箇所がクライアントの都合で変更不可であったり、その場所の長年の利用者でなければ分からない細かい要望が得られたり、ということである。また、クライアントの細かい要望に全て答えたデザインが必ずしもいいものと言えるわけではなく、相手の見えないニーズをくみ取って「提案」を通じて説得することの重要性、そして難しさを身をもって感じた。これは建築設計に限らず研究や仕事においても共通する点と考えられるので、今後も心に留めておきたい事項の一つである。



2-2. レクチャー

レクチャーは、デンマークの建築事務所である Schmidt Hammer Lassen に勤める勝目雅裕氏による手書きスケッチの利便性と練習方法について、Rambøll に勤める加藤比呂史氏によるデンマークで働くことになった経緯や現在のプロジェクトの話、そして Juul Frost Architects に勤める Søren（ソレンセン）Arildskov 氏によるコペンハーゲン市の変異についてであった。また、秋田大学の原教授にはデンマークの教育制度についてレクチャー頂く機会があり、そこからデンマーク人の、働くという行為に関する考え方を垣間見ることができた。「フォルケ・ホイスコレ」と呼ばれる成人教育機関の説明から、日本では全体として学年と年齢がある程度一致しているのに対して、デンマークでは年齢と学年は全く関係ないことが分かった。学びたい人は続けて学び、働きたい人は働き、転職したい人にも学びの場が開いているというように、個人個人のニーズに合わせた教育制度が整っているのが北欧のシステムとなっている。

2-3. 街歩き

有名建造物や歴史的建造物への見学を数多く行うことで、写真などでは感じることはできないスケール感や、ディテール、空間の与える印象などを把握することができた。特に、デンマークの集合住宅ではベランダを歩行者に見てもらえるようお洒落に工夫してあるようなものが多く人々の生活を建物の外にしながらも感じる事ができた。また、互い違いやランダムなベランダの配置によりベランダにいる人たち同士での交流が生まれるといったような、コミュニティ形成に寄与するデザインが多かったことも特徴として挙げる事ができる。伝統的建物を保存しつつ、その周りを囲うようにガラスのファサードを付け足したり、中だけをリノベーションしたりという手法が非常に多く利用されており、日本との建築物に対する価値観の違いを感じ取った。

2-4. 建築事務所見学

本プログラム参加の大きな目的の一つが、現地事務所見学であった。一般には立ち入ることが困難な大手設計事務所の中を見学しつつ、どのようなワーキング・スタイルか、どのようなプロジェクトをどのように進めているのかを社員から直接聞くことのできる稀な機会であった。職場環境は上下のフラットな関係を目指しているものが多く、事務所によってはオフィスを他企業と共有し、コラボレーションを実現している場所も数々見られた。残業時間は少なく、定時で帰宅する社員が多い。しかし、特にコンペ部門においては仕事に割いている時間は日本よりも多いのではないかという現職者の意見もあり、効率の良い分業が成されていると言える。日本人としては「ハードワーカー」であること、「職人気質」であることが海外へのアピールポイントになるということが、現地で働く日本人建築家の話により分かった。



3. 得られた成果

以下は、上記のプログラム内容を通し、海外での建築家の働き方に対する知見が多いに得られた。

- ① 職場内での役割分担が明確である。そのため、オールラウンドな技術を持つよりも、専門的な得意分野を持つ人材の方が多く有利である。
- ② 日本が物理的な模型を作る文化を維持しているのに対し、海外ではコンピューターを用いた三次元パースが主流である。三次元パースのスキルは海外の建築事務所で働く際には必須と言える。
- ③ 建築学科卒業後の進路としては、公務員や自立する学生が多い。自立というのは、自身で簡易的に（インターネットを用いて）事務所を立ち上げ、関連のあるフリーランスやパートタイム（大学のTAなど）を行うという流れが主流である。
- ④ 職場環境は上下のフラットな関係を目指しているものが多く、事務所によってはオフィスを他企業と共有し、コラボレーションを実現している場所も数々見られた。

本プログラム参加の目的は、日本人が海外で建築分野において働く上で考慮すべきことや、日本人としての価値を見つけることであった。日本のオールマイティな教育制度を経て就職する際には得意分野を絞っておく必要があること、そして日本人としてのきめ細かさや働き者の気質を存分にアピールしていく必要があることが分かった。特に、三次元パースなどの表現力の点で力を伸ばしていくべきだと言える。これらをクリアできれば、ヨーロッパでは世界各国からインターン生を受け入れているため、活躍の舞台として考慮する余地がある。このように働き方や求められる資質が異なることを理解した上で、根底には「教育に対する考え方」、「建築そのものに対する考え方」の違いが影響していることを、身をもって実感した。海外で働くに当たり、「スキル」や「英語力」だけでなく、このような基本的な部分から他国の考え方を理解し、それに応じて自分の選択を行っていきけるような制度が整っていくことが望ましい。